

觀察遊び二つ三つ

— 保育日誌の中から —

附屬幼稚園 清水光子

「あーんち」

「先生、こんなにくつつけたの」と言つてお山へ行つてゐた兵隊さん達が四五人駈つて來た。みると前掛もズボンも一ぱいになるこづちがついてる。「やあ、蟲だ、蟲だ」といつてゐる子どももある。「蟲かしら、でも動かないぢやないの」「これこの草についてたんだよ」ともう種子のすつかりとれたるのこづちを五六本手にして得意さうな一人がある。「さうね、この草の、種子なのよ。よくくつつくでせう。でもどうしてくつつくのかしら、どれぞれ」と言ひ乍ら前掛にくつついてゐた實を一つとつてよくみる。ひげが鉤のやうになつてゐるのをそばの子どもにみせる。「よくみえないや」と言ふ子ども、「ちや先生がいゝものもつて來ま

すから」と蟲眼鏡をもつて來た。「手のひらにのせた二三粒の實をみせる」「大きく見えるでせう、曲つたひげみたいなもの、あれでくつつくのね」「僕にも」「私にも」といふわけで列になつて順々に、人の前に立つて明るさをさへぎらないやうに氣をつけてみることにした。そして一通り見終つたころ、「シヨクアツノチエ」といふ繪本をもつて來て見せた。何の氣なしに見てゐた繪がこゝではつきりした様な子ども達の面持であつた。

「どんぐり」

どんぐり拾ひに本校の庭に行つた。私は五つ、僕は七つと數へ乍ら拾つて大いにも落ちてゐないやうなものになほもさがす。すると土に半分埋つて芽の出てるのを見

つけた。

「あ、これ芽が出てる」と驚いた様な聲をあげてみせに來る。「どんぐりの芽?」「どんぐりの木になるの?」ときく。「えゝ、きつとどんぐりの木になるのでせうね。大事にもつて歸つて土にうめておきませう。お家でするといふその子のために、少し出た小さい白い幼根を折らないやうに紙につゝんだ。包み乍ら實が斯うして土におちてかたいかわを破つて根を出して大きくなるのを話した。おかめどんぐりませて十位づつ拾つたどんぐりの形のいゝので幼稚園に歸つてからコマを作つた。ひごをさしてまわしてみる。ひごのさし方をまつすぐに、長すぎないやうに、よくまはるやうに自分自分で工夫して、そして廻しつこをして遊んだ。

「煙突」

本校の庭に遊びにゆく時、色々數限りなくとも言へる程觀察材料があるのだけれど、これもその面白い一つである。まづその高さ、「高いねえ」「天までとゞきさうだね」「天までなんかないわね先生」「さあ、あなたのせいをいくつつなげた位あるかし

ら」そこで煙突のコンクリートのつなぎめが殆ど等間隔にある事を見つけ、つなぎめが二十八あり、その間一つが○ちゃんの背位だからちやうど二十九人つなげた位といふことを先生が數へて話す。この間に煙突が動いてゐると言ふ子どもがある。「本當にさう見えるのね」と見てゐる中結局雲が動いてゐるのだといふ事が判つて來た。「運動の相對性」と先生は心の中で思ふ。一しきり雲をみてあの雲は何みたい、お魚のやう、犬のやう、など可愛い、想像が空を馳けまはる。

「ばかり」

八百屋二つこをして秤を作つてみた。ごく簡單なさをばかりである。割箸のわつたののかどを取つて桿にし古葉書でつくつたお皿をつるし持つ所をつけ、粘土で分銅をつくる。これをつくる前、葉を測る小さい桿秤があつたのでそれをまづよくみせた。次に大きい桿秤をもつて來て實際に測つてみた。○ちゃんのおべんたう。これは分銅を一寸動しただけで測れた。重いものを測つてみませうといふことになつておへやの中心を見まわす。「重いもの、何がいゝでせう」

と皆で考へたら犬の石製の置物があつた。それを測つてみたら一貫目近くあつた。測り乍ら「こゝ」を持つて、釣合ふやうにする。そのすぢをみて何処つてよむのです」と話す。平均のとれることを釣合ひといふ言葉を使ふことにした。そこで銘々がこしらへて支點の位置の取方、はじめの目盛り(數はかゝらずすぢだけ)の取方を何ものせないで釣合ふ所だといふことをやつてみせて、自分できめさせる。斯うして秤が出来ると八百屋さんのお店は俄に賑やかになつた。そしてトマト二つで一貫目百圓なごいふ途方もない數が出て來る。それはよく實際のもので説明して直させるやうにした。たゞ紙粘土で作つた野菜は輕いので手重みの感じて實際の目方を大體知ることには都合が悪かつた。そこで百匁とは百瓦とは大體この位の重みの感じといふことも何かの機會にしてみやうと思つてゐた。幼兒體力検査の中の投擲ボールは百五十五瓦なのでそれをまづ引合ひに出してみた。けれどこの年齢の子ども達にはまだ抽象數の觀念がないので數よりもたゞこの大ききのこんなたちのものならこの位の重み、といふことを經驗

するだけでよいのではないかと思ふ。

「おべんたう箱」

「こちさうさまー」あら、もうすんだの、早いなあ「残したんぢやないかい」残すものか、ホラね」と開けてみる。「ほんどだ」「でも○さんのは小さいのですもの、早いわけよ」といふ抗議が出る。そこでおべんたう箱の入り工合を、(大きき)ためしてみませうといふ事になつた。おべんたうのすんだ人のを、四角のニュームのやこばん形アルマイト、塗りのなど形、大きき種々のなならべて丁度デシ立の楯があつたのでそれに水を入れておべんたう箱にうつし、これはいくつ入つた、これは三つと半分、これは四つと一寸といふ様に測つてみた。斯うすると小さくみえてせの高いのが存外多く入つたりする。大人でも仲々見當がつかない事を知つた。小さい事であるけれどやつてみるとうわるといふことがわかつて、子ども達も斯うして測つてみたりする事を大變喜んだ。